

知見の囿炉裏端

初めての著作を上梓



技術経営士の会 伊東 千秋



現役を退いてからは、3社の社外取締役を務めながら、月3-4回程度の講演という日々を過ごしてきた。人前で話をするということは決して嫌いではないので、頼まれれば日本全国どこへでも出かけて行く。そして、講演終了後の質疑応答や、その後の懇親会で聴衆の方々とお話こそ、私には大変役に立った。こうした講演や、雑誌・新聞への投稿をしている中で「御本を出されたいかがですか？」という話は、これまで何度も頂いた。しかし、それが具体的に進展するまでには至らなかった。

いくら、嫌いではないとはいえ、徐々に体力も衰えていく中で、立ちっぱなしの90分間の講演もいつまで持つかなと不安に思っていた。そのうちに、家に籠り本に囲まれながらゆっくりと執筆活動に入るのも悪くはないかなと思っていたら、突然のコロナ禍で強制的に家に籠らざるを得ない状況になった。

そんな中で、古巣の富士通からお客様向けフォーラムをオンラインで開催するので講演してもらいたいという依頼が来た。演題は「ポストコロナ時代に向けて」ということだった。オンラインフォーラムというのは、主催者側も会場費もかからず経費節減ができるし聴衆も好きな時間に聴けるのでお互いのメリットは大きい。一所懸命資料を作って講演をしたのが今年の秋である。

せっかく、頑張って資料を作ったので、社外取締役をしている会社の取締役会で、ご披露させて頂いた。それを聴いていた同じ社外取締役をされている同僚の方から「伊東さん、この話を本にして見ましょうよ！」という誘いを受けた。コロナ禍で、毎日、家に籠って時間だけは沢山あり、せっかくのお誘いなので、その話に乗ることにした。しかし、本を作るというのが、いかに大変か思い知った。最初に私が書き上げた原稿は、およそ7万字だったが「最低でも10万字以上ないと本にはなりません」と編集者から叱られて、それから初心者私と編集者の苦闘を10ヶ月ほど続けて、ようやく2021年10月18日から発売となった。題名は『2022年再起動する社会』である。Amazonの予約販売は10月1日から開始したが、お陰様で、現在、売り上げランキングでは上位につけている。以前から、著作を上梓するなら、ネットを使ったPR活動が重要と言われている。それを見越してというわけでもないが、これまでFacebook, Twitter, LinkedInなどのSNSや独自のブログなどを見て頂いているフォロワーの方々に向けて事前PRをしたのが効いたのか、予約販売開始直後にはAmazonの「国際ビジネスカテゴリー」で3位となり、AmazonのAIが判断している新刊の発注数が過去最大となった。

AmazonAIのアルゴリズムは著者のネットでトラフィックや著書の目次における「現代感」などを総合評価して決めるらしい。なんだか大変なことになってきた。ご参考に、表紙の写真を添付します。

